

## 生きる。

浦添市立港川中学校三年 相良 倫子

肩を揺らすほどの荒い呼吸。チューブに繋がれた鼻。酸素を吸入しないと呼吸さえままならない。真っ赤な顔は、三十九度六分の高熱のせいだ。

「おばあちゃん…。」

曾祖母の手を握る。黒い斑点だらけの、痩せて骨ばった手が、わずかな力で私の手を握り返してくる。

懸命に生きようとする命が、ここにある。

肺炎。今年九十五を迎える曾祖母が、突然倒れた。血液の炎症検査によれば、通常零点三以下といわれる数値が十六を越えている。危険な状態にある事など、私にもすぐ見て取れる。

私の曾祖母は、七十三年前の沖縄戦で、日本軍第三二軍の最高司令官、牛島満中將の散髪担当だった。『最後まで敢闘し、悠久の大義に生くべし』と自決前に命令を下した「牛島満中將」と、曾祖母の語る「牛島さん」には、大きな相違がある。

「牛島さんはねえ、本当にお優しい方だったよお…。おばあちゃんがねえ、「おかえりなさいませ」って三つ指ついて出迎えたらねえ、「鹿児島の実家に帰ったみたいで嬉しいです」って、おっしゃったんだよお。配給の煙草もねえ、おばあちゃんが、店の御主人のために取りに行ってるって聞いてねえ、「早起きして並ぶのも大変でしょう」とおっしゃって、「これを持っていきなさい」って、たくさんの煙草を持たせてくれたんだよお。最後にお会いしたのは十・十空襲の後だったさあ、首里の龍潭池の横でねえ、牛島さん、わざわざ車から降りてきて下さって、「お元気でしたか」っておっしゃられてねえ、おばあちゃんも頷いて、「閣下もお元気で」って。いい方だったさあ。戦争の話なんて、一度もしなかったんだよお…。」

曾祖母から私は何度もこの話を聞かされ育った。そして彼女は必ず話をこうしめくくった。「戦争は、人間を角のない鬼に変える。絶対にしてはいけないさあ。」

私はこれまで、曾祖母の経験を経験の生き導として何度も聞き、学び、考えてきた。曾祖母は戦争の愚かさ、虚しさを、一貫して私に説いてきた。過去のことを過去のことでと言っただけで片付けてしまっただけではないこと。それによって、私達は未来をも放棄してしまうのだと。曾祖母は私の目を見て、真剣に語った。奪い合わずに分け合いなさい。相手の思いを想像しなさい。良い戦争も、悪い平和もない。平和であれ、幸福に感謝せよ。調和する力をつけなさい。

曾祖母の思いはしっかりと私に伝わっている。私の血となり肉となり、私の中に記

銘される。伝承。伝受。ひ孫である私の想いは、大好きな「おばあちゃん」の想いで、できている。

今年私は中学三年生になった。学校では、歴史の授業で太平洋戦争について学んだ。沖縄がどのように戦争に至り、その後、どのような扱いを受けてきたか、学んだ。太平洋戦争末期の最後の捨て石に沖縄がなったことを知った。それらは私の中で客観的事実と捉えられ、そこに、更に、曾祖母の生き導が重なる。重なりゆく史実と曾祖母の生き方が私の心を突き動かす。多くの事を学ぼうと、考えようと、そして、自分で判断できる人になろうと。

私の育った島、沖縄の海は、どうしてこんなに青いのだろうか。広がりゆく蒼穹はどうしてこんなに美しいのだろうか。実り多き大地はどこからくるのだろうか…。きつとそれらは、悲しい事実を秘めた時の経過の中で創られてゆく産物なのだ。私は、考える。そこで今、私が担うものは何だろうか。できることは何だろうか。しなければいけないことは何だろうか…。自分の力でみつけないといけない。そのために、生きるのだ。

生きる。私の曾祖母「おばあちゃん」は激動の時を懸命に生きてきた。生きる。私のおばあちゃんは、生きることの大切さを、みんなが安心して生きることが出来る平和を、懸命に私に伝えてきた。平和は誰かのものではない。一部の人間のものでもない。みんなが、平等に「生きる」のだ。それが、「平和」なのだ。

五月初旬。大病院の院室に、今も曾祖母は生きている。ベッドに身体を横たえ、また、戦争の話を聞かせてくれる。もう、そろそろの時期だね、みんなが生きる世の中を創ることが、大事なんだよね、おばあちゃん。

曾祖母は、その平和を願う想いが、彼女の大きな一部となって、この今を生きている。そして私も、時を越え、人間としてあるべき姿を曾祖母から受け継ぎながら、今を生きる。二人の「今」が混ざり合い、共有される。そうだ。みんなが今を、生きなくては。

私は、胸を張り、生きる。こんなに強く、美しい「おばあちゃん」を誇りに思う。これからも生きよう。曾祖母の願いをこの胸に抱いて。これからも生きよう。「おばあちゃん」の背中から学んだことを伝えゆくために。人は皆、生きる権利があること、恐怖や恐れなどいらぬ。何にも束縛されず、強制されず、それぞれの人生を謳歌して、輝いて生きてゆくことが、平和の定義だということを。

大好きな曾祖母に感謝して、これからも私は生きる。「私は自身のこの人生をいかに生きるのか」それが命題と心に留めて。